

(テーマ) 「神武東征の出発点はどこか？」 (副題) 日本書紀の作られ方 (5W1H) (P-01)

(会員番号: 10066 米田喜彦)

(P-02) : 天武天皇から任命された(系図を持ち寄った)豪族たちと、(設計図を書いた)官僚。  
: 「忌部連首(おびと)」と「中臣連大嶋」と、算術に優れた「阿倍宿奈麻呂(少麻呂)」。

(P-03) : 中臣氏(天神系)の系譜の紹介。『古代豪族系図集覧』P-3(神統譜・天神系)  
: 「忌部(阿波忌部)」と、「中臣氏」の系譜と、自作の年代のすり合わせを、しています。

(P-04) : (「シンメトリック論」について)

(P-05) : 「イザナキ(紀:一書)」の人物を特定して、自作の系図に当てはめてみました。

(P-06) : <「いつとものお(五伴緒/五部の神)」について>

(P-07) : 関東(房総)への移住の流れ

(P-09) : 出発地点としての「南九州」について、と、朴昌和版「婆娑尼師今記」の紹介。

(P-12) : 「橋頭保」としての「淡路島」について、と、まとめ。

(P-13) : (付録) (いつ・誰が) 橿原で即位したかを考察します。

「  
| (2019年1月 第8回討論型会員研究発表会) テーマ: 「神武東征の出発点はどこか？」  
| 大和朝廷成立につながる神武東征の出発点については通説では宮崎県と言われています。  
| 一方、津田左右吉は「日向は熊襲と呼ばれる逆賊の占拠地であり皇室の発祥地ではありえない」と  
| 主張しています。果たして、宮崎が出発地点であったのか? それとも、別の地点だったのか?  
|

※: この古代史論は、「神武東征の出発点はどこか?」という命題を、「5W1H」という視点から  
: 立体的に眺めようと、自説の「神武天皇論(未完成)」を、作り直した小論(レジメ)です。

(紹介) : 「シンメトリック論」について

※: 2012年に、ある人から、天皇の在位年数における「シンメトリック」現象を紹介されました。

「  
| 16 : 日本@名無史さん: 2005/11/17(木)09:14:42\_\_ (「16/YXRFBRM」氏が発見したシンメトリック論)  
| \_\_\_\_\_ 「孝霊紀から壬申紀までは、133/60/68/99/121/121/99/68/60/133」と区切れて面白い。」  
|

※: その後、marishi氏による、「37倍数論」を知りました。

\_\_ : その後、米田の考察による、「干支を利用した年代ごまかし論」に、たどり着きました。

○: ここまでは、「シンメトリック論」の構造(三部作)の紹介でした。

\_\_ : 私は、系図と(史料の)干支(年表など)を使って、古代史の年代を調べて来ました。

\_\_ : その私の研究に、「シンメトリック論」という、新しい手法が加わりました。

(「シンメトリック論」は、平成29年5月6日投稿の「4世紀の紀年論」の6頁目で発表しています。)

(紹介) : 朴昌和版「婆娑尼師今記」について

※: 偽書の評価を受けていますが、『三国史記・新羅本記・婆娑尼師今』の記述よりも、正確なので、

\_\_ : 私は、研究に使っております。故人になりましたが、江口素里奈氏に、和訳を手伝って頂きました。

\_\_ : (江口素里奈氏とのやりとりは、「東アジアの古代文化を考える会」のHPの「討論室」に保管。)

(紹介) : 「KJ法」について

※: 「KJ法」は、多くの断片的なデータを統合して、創造的なアイデアを生み出したり、問題の解決の

\_\_ : 糸口を探っていく手法です。私は、史料(資料)の大半は、「すべてを正しい。」と考えました。

\_\_ : 「すべてを正しい、とすると」という手法は、自分なりに解釈したKJ法を利用(活用)しています。

「忌部子人（首）」：（いんべ / いみべ / いむべ の こびと / こおびと / おびと）（P-02）  
：出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より（加筆・抜粋）

死没：養老3年間7月15日（719年9月3日）官位：従四位上・出雲守  
主君：天武天皇→持統天皇→文武天皇→元明天皇→元正天皇  
氏族：忌部首→宿禰  
父母：父：忌部佐賀斯 兄弟：子人、色夫知 子：狛麻呂、馬麻呂、菟

：忌部子人は、飛鳥時代から奈良時代にかけての貴族。名は子首、首とも記される。姓は首のち連、宿禰。  
：神祇頭・忌部佐賀斯の子とする系図がある。官位は従四位上・出雲守。  
：672年の壬申の乱の際、大海人皇子（天武天皇）側について倭京を守備した。天武天皇11年（682年）に  
：帝紀と上古諸事の編纂の一員となり、中臣大島と共に少なくとも編纂初期の執筆の中心になった。  
：これは没後間もない養老4年（720年）に『日本書紀』として完成した。  
：長命を保ち天武朝から元正朝までの五朝に仕え、位階は従四位上に至る。

「中臣大島」：（なかとみ の おおしま）（中臣大嶋から転送）  
：出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より（加筆・抜粋）

死没：持統天皇7年3月11日（693年4月21日）（659年生～720年没）  
官位：直大弐・神祇伯 （614年生～669年没） ↓  
主君：天武天皇→持統天皇 可多能枯—国子—中臣国足  
氏族：中臣連→中臣朝臣→藤原朝臣→中臣朝臣 糠手子—金（672年没）  
父母：父：中臣渠每（こめ：許米） 子：馬養 中臣許米—中臣大嶋（693年没）

：中臣大島は、飛鳥時代の貴族・漢詩人。氏姓は中臣連のち中臣朝臣、藤原朝臣、中臣朝臣。  
：中臣渠每（こめ：許米）の子。官位は直大弐・神祇伯。  
：経歴  
：中臣鎌足・金の後を継いで中臣氏の氏上の立場となり、天武・持統朝で内政・外交の両面で活躍した。  
：また、持統朝では神事での活動も目立ち、律令国家確立期にあつて、政祭両面で重要な役割を果たした。  
：朱鳥元年（686年）正月に新羅使・金智祥を饗応するために、大島は河内王・大伴安麻呂・境部鯨魚  
：・穂積虫麻呂と共に筑紫に遣わされた（この時の冠位は直大肆）。  
：その後、藤原不比等の立身に伴って、大島は藤原朝臣姓から中臣朝臣姓に復姓している。  
：持統天皇4年（690年）持統天皇の即位の儀に際して、神祇伯として天神寿詞を読んだ。  
：また翌持統天皇5年（691年）の大嘗祭でも天神寿詞を読んでいる。  
：持統天皇7年（693年）3月11日に購物を与えられており、この日に卒去したか。

「阿倍宿奈麻呂（少麻呂）」：（あべ の すくなまろ） ←（推測：シンメトリックの仕掛け人）  
：出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

死没：養老4年1月27日（720年3月10日）官位：正三位・大納言  
主君：持統上皇→文武天皇→元明天皇→元正天皇  
氏族：引田朝臣→阿倍朝臣  
父母：父：阿倍比羅夫 兄弟：宿奈麻呂、引田広目、安麻呂、船守 子：駿河、子島、毛人

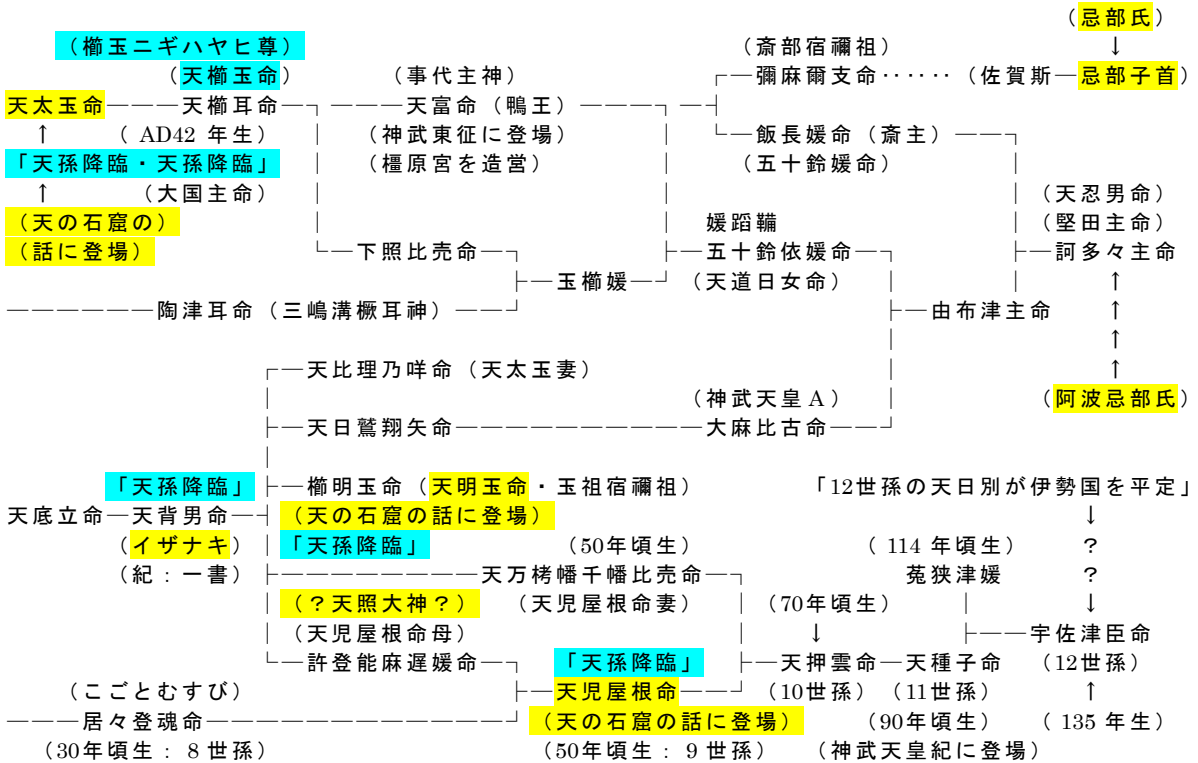
：阿倍 宿奈麻呂は、飛鳥時代後期から奈良時代前期にかけての公卿。名は少麻呂とも表記される。  
：筑紫大宰帥・阿倍比羅夫の子。官位は正三位・大納言。  
：経歴  
：大宝2年（702年）持統上皇の崩御にあたり造大殿垣司を務める。従四位下に昇叙された後、  
：慶雲元年（704年）引田朝臣から阿倍朝臣に改姓する。前年の大宝3年（703年）に  
：右大臣・阿倍御主人が薨御しており、宿奈麻呂が阿倍氏の氏上となったか。  
：慶雲4年（707年）文武天皇崩御の際には造御竈司を務めている。  
：また和銅年9月には多治比池守と共に造平城京司長官に任ぜられ、平城京造営の責任者となる。  
：元正朝では、靈龜3年（717年）正三位に昇叙され、養老2年（718年）大納言に至る。  
：養老4年（720年）正月27日薨去。最終官位は大納言正三位。  
：人物  
：算術に優れ、藤原仲麻呂に算術を教授したという。  
：算術の技能を買われて、たびたび造営官司を務めたものと想定される。

※：『続日本紀』の養老4年5月、「日本書紀」完成。  
※：「藤原不比等」養老4年8月3日（720年9月9日）死没。

※：中臣氏（天神系）の系譜 『古代豪族系図集覧』 P - 3 （神統譜・天神系）より  
く（藤原鎌足から逆算した時の）一世代30年とした時の、おおよその、**生まれた年代**。>

- (-250年) (初代) 天御中主神 ←：天御中主神の活躍は、徐福が活躍（移住）とほぼ同時期。  
(子・孫〜7世孫) (-220年／-190年／-160年／-130年／-100年／-70年／-40年)
- (-10年) (8世孫) 居々登魂命（こごとむすび）
- (020年) (9世孫) 天児屋根命（**天の岩戸**の話に登場）←：天照大神の死亡は、1世紀の後半頃。
- (050年) (10世孫) 天押雲命
- (080年) (11世孫) 天種子命（神武天皇紀：甲寅114年）：**天種子命は、菟狭津媛を妻にした。**
- (110年) (12世孫) 宇佐津臣命（風土記：伊勢国：東洋文庫 P-284 より）  
(伊勢の国は、天御中主尊の12世の孫の天日別が平定した所である。)  
**（神倭磐余彦の天皇が、あの西の宮（日向）からこの東の洲（くに）を征討された時、云々。**
- (140年) (13世孫) 御食津臣命
- (170年) (14世孫) 伊賀津臣命（風土記：近江の国・伊香の郡）
- (200年) (15世孫) 梨迹臣命（母は天女の妹）
- (230年) (16世孫) 神間勝命（常陸国風土記：崇神天皇と神間勝命のやりとり。）
- (260年) (17世孫) 久志宇賀主命
- (290年) (18世孫) 国摩大鹿嶋命（垂仁天皇紀）
- (320年) (19世孫) 巨狭山命（狭山命）（常陸国：倭武天皇のみ世に天の大神が中臣氏狭山命に云々）
- (350年) (20世孫) 雷大臣命（中臣烏賊津使主）（神功皇后紀：中臣烏賊津使主を喚（よ）び、云々。）
- (380年) (21世孫) 大小橋命 ↑
- (410年) (22世孫) 中臣阿麻毗舍（神功皇后は、4世紀後半に活躍。太歳辛巳＝381年）
- (440年) (23世孫) 阿昆古（太歳：かのと・み）
- (470年) (24世孫) 真人
- (500年) (25世孫) 鎌子（黒田）（欽明天皇紀13年：551年：中臣鎌子は云々。）
- (530年) (26世孫) 常盤
- (560年) (27世孫) 可多能枯
- (590年) (28世孫) 御食子
- (620年) (29世孫) 藤原鎌足（614年生〜669年没） ※：左端の数値（年代）は、生年です。
- ( \_\_\_年 ) (30世孫) 藤原不比等（659年生〜720年没）

◎：「忌部（阿波忌部）」と、天神系（中臣氏）の系譜と、自作の年代のすり合わせを、しています。



\_\_ : 合計 481 年というのは、① : 上下それぞれの和です。② :  $37 \times 13 = 481$ 、という分け方もできます。  
\_\_ : ③さらに、 $60 \times 8 + 1 = 481$  年、という分け方もできます。( + 1 で、同じ干支に戻ってきます。)

※ : この①が、(「16/YXRFBRM」氏が発見したシンメトリック論)。  
\_\_ : この②が、(marishi 氏による37倍数論)。  
\_\_ : この③が、「シンメトリック米田論 : (干支年)  $\pm 60n$  論」。

<風土記 : 伊賀国>

※ : 伊賀の国は昔伊勢の国に属していた。孝靈天皇の御宇(みよ)の癸酉(みずのと・とり : 253年)  
\_\_ : の歳にこれ(伊勢の国)を分かって伊賀の国とした。(孝靈天皇元年の干支は、辛未 : AD251年)

※ : (「16/YXRFBRM」氏が発見したシンメトリック論) (marishi 氏による37倍数論)

第07代	孝靈天皇	辛未	BC290	76年			
第08代	孝元天皇	丁亥	BC214	57年	133年		
第09代	開化天皇	甲申	BC157	60年	60年		
第10代	崇神天皇	甲申	BC97	68年	68年		
第11代	垂仁天皇	壬辰	BC29	99年	99年		
第12代	景行天皇	辛未	AD71	60年			
第13代	成務天皇	辛未	AD131	60年 + 1年	121年	( $37 \times 13 = 481$ 年)	
第14代	仲哀天皇	壬申	AD192	09年			
攝政	神功皇后	辛巳	AD201	69年			
太歳		己丑					
第15代	応神天皇	庚寅	AD270	41年 + 2年	121年		
第16代	仁徳天皇	癸酉	AD313	87年			
第17代	履中天皇	庚子	AD400	06年			
第18代	反正天皇	丙午	AD406	05年 + 1年	99年		
第19代	允恭天皇	壬子	AD412	42年			
第20代	安康天皇	甲午	AD454	3年			
第21代	雄略天皇	丁酉	AD457	23年	68年	( $37 \times 8 = 296$ 年)	
第22代	清寧天皇	庚申	AD480	05年			
第23代	顕宗天皇	乙丑	AD485	03年			合計 : 481年
第24代	仁賢天皇	戊辰	AD488	11年			
第28代	宣化天皇	丙辰	AD536	04年	60年	( $37 \times 5 = 185$ 年)	
第29代	欽明天皇	庚申	AD540	32年			
第39代	弘文天皇	壬申	AD672	01年	133年		

※ : 「シンメトリック米田論 : (干支年)  $\pm 60n$  論」

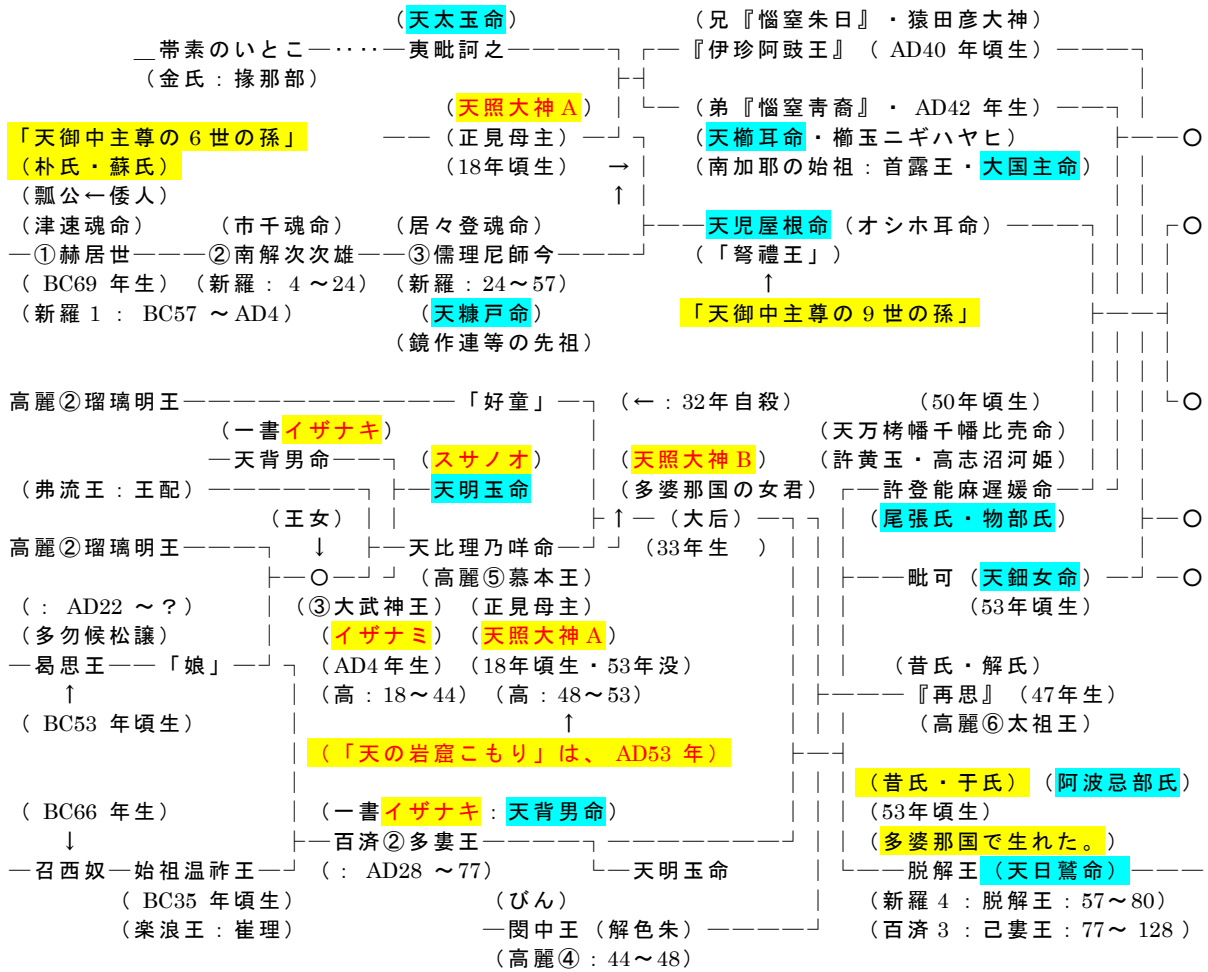
\_\_\_\_\_ (公式太歳年) \_\_\_\_\_ (計算上の基準年) \_\_\_\_\_ (太歳) (実際の基準年)

孝靈天皇	BC290年	← 540年差 →	AD251年	(AD251年・辛未)	
孝元天皇	BC214年	← 480年差 →	AD267年	(AD267年・丁亥)	
開化天皇	BC157年	← 420年差 →	AD264年	(AD264年・甲申)	
崇神天皇	BC97年	← 360年差 →	AD264年	(AD264年・甲申)	$264 + 36 = 300$
垂仁天皇	BC29年	← 300年差 →	AD272年	(AD332年・壬辰)	
景行天皇	AD71年	← 240年差 →	AD311年	(AD311年・辛未)	$311 - 36 = 275$
成務天皇	AD131年	← 180年差 →	AD311年	(AD311年・辛未)	
成務60年合計 (480年)			合計 (120年)		

仲哀天皇	AD192年	← 180年差 →	AD372年	(AD372年・壬申)	
神功皇后	AD201年	← 180年差 →	AD381年	(AD381年・辛巳)	
応神天皇	AD270年	← 120年差 →	AD390年	(AD390年・庚寅)	
仁徳天皇	AD313年	← 60年差 →	AD373年	(AD373年・癸酉)	
履中天皇	AD400年	(ほぼ0年差)	AD400年	(履中天皇の誕生年か)	
反正天皇	AD406年	(ほぼ0年差)	AD406年	(反正天皇の誕生年か)	
允恭天皇	AD412年	(ほぼ0年差)	AD412年	(AD412年・壬子)	

※：「イザナキ（紀：一書）」の人物を特定して、自作の系図に当てはめてみました。

（投稿図：紀元前後の「半島の登場人物」と「記紀等の登場人物」の自作合成図）



『日本書紀』目次：神代上（かみのよのかみのまき）／神代下（かみのよのしものまき）／神武天皇

- ：第六段、アマテラスとスサノオの誓約：アマテラスはスサノオと誓約し、五男三女神を産む。
- ：第七段、天の岩戸（岩戸隠れ）スサノオは乱暴をはたらき、アマテラスは天の岩戸に隠れてしまう。
- ：第八段、八岐大蛇：スサノオが出雲に降り、アシナヅチ・テナヅチに会う。
- ：第九段、葦原中国平定・天孫ニニギの降臨、サルタヒコの導き、ヒコホホデミラの誕生。
- ：第十段、山幸彦と海幸彦の話。←（4世紀、風土記、倭建天皇のエピソードからの流用のため、省略。）
- ：第十一段、神日本磐余彦尊（かむやまといはれびこのみこと）誕生。
- ：巻第三：東征出発・八咫鳥・長髓彦・宮殿造営・橿原即位。

※：「イザナミ（高麗③大武神王）」は、AD44年に亡くなったので、亡骸は、『古事記』によれば  
 出雲と伯伎（伯耆）の境の比婆山（中国地方にある島根県安来市伯太町）に、葬られたという。  
 ※：「イザナキ（百濟②多婁王・天背男命：阿波忌部の祖先）」は（淡路島で）AD77年に亡くなった。  
 （説話）

イザナギは、黄泉国と地上との境である黄泉比良坂（よもつひらさか）の地上側出口を大岩で塞ぎ、  
 イザナミと完全に離縁した。岩の向こうからイザナミが「お前の国の人間を1日1000人殺してやる」  
 と言うと、イザナギは「それならば私は産屋を建て、1日1500の子を産ませよう」と言い返した。  
 （説話の元ネタ：三国志韓伝「魏略」は、次のように伝えている。」：東洋文庫より）

※：昔、右渠（うきよ）がまだ〔衛満に〕破られなかったとき、朝鮮の宰相である歴谿卿（れきけいけい）  
 は、右渠を諫めたのが原因で、〔右渠から疎まれ〕用いられなかった。  
 王莽の地皇年間（20~22）に、廉斯（れんし）の鏹（さく）は辰韓の右渠の家臣であったが、云々。

- : 第六段：五男三女神を産む。：「天照大神 A」と「天照大神 B」の子どもを合わせると、五男三女。
- : 第七段、天岩戸（岩戸隠れ）：「天照大神 A」が亡くなり、娘が「天照大神 B」として即位した。
- ：乱暴をはたらいた「スサノオ」は、「天明玉命」だろうと思います。

<「いつとものお（五伴緒／五部の神）」について>

※：記紀に出てくる「五部の神」は、新羅・高句麗の六加・五族と同じと考えました。（古雛加は女系）

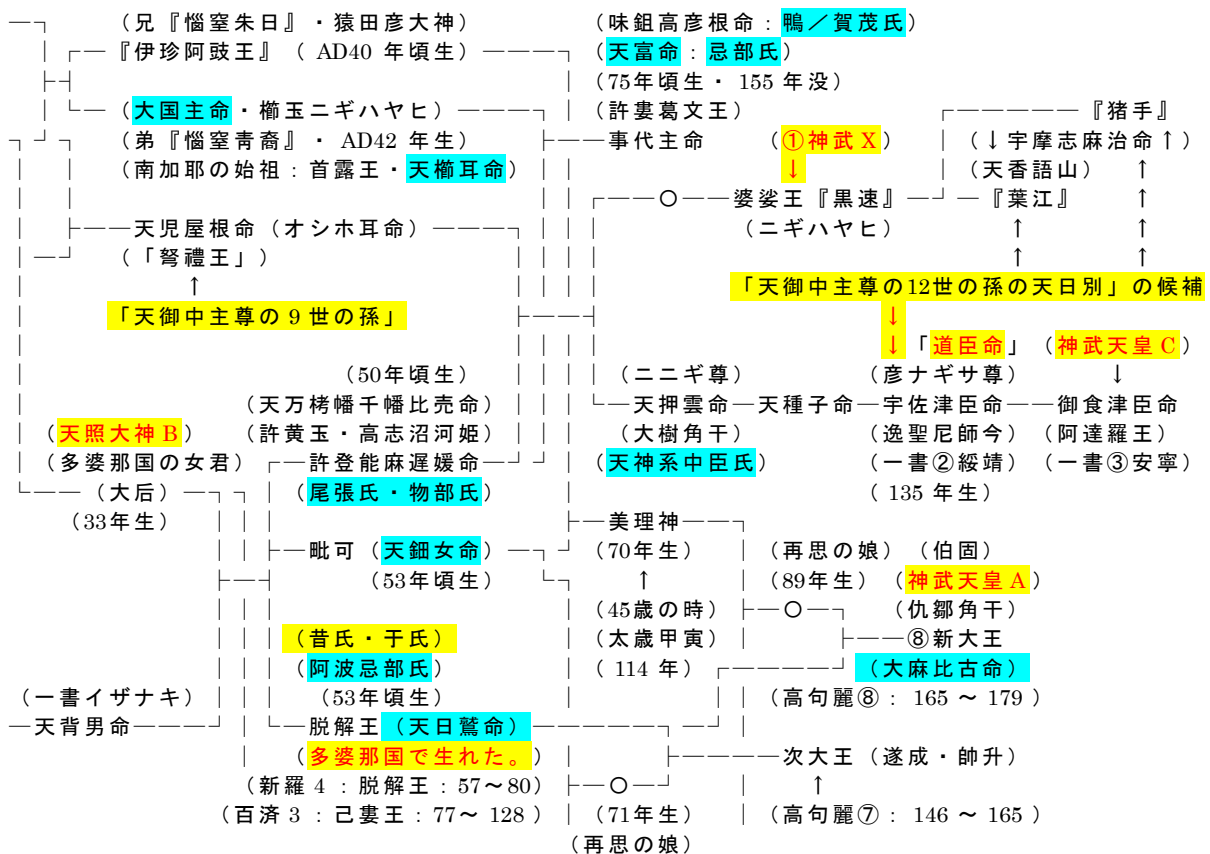
- : 天糠戸の娘 = 石凝戸辺（いしこりとべ）：石凝戸辺（女）は、鏡作連等の遠祖ですが、夫の氏は不明。
- : 天児屋命（こやね）：中臣連らの祖：天児屋命は、天糠戸の子で、中臣氏（朴氏・蘇氏）です。
- : 天鈿売命（うずめ）：猿女君らの祖：天鈿売命の父は、閔中王（解色朱）で、昔氏（解氏）です。
- : 天太玉命（ふとたま）：忌部首らの祖：天太玉命の子は、金首露で、忌部氏（賀茂氏・金氏）です。
- : 天明玉命（あかるたま）：玉作連らの祖：天明玉命の父は、天背男命（イザナキ）で、昔氏（于氏）。

※：『古語拾遺』：天日鷲神は、太玉命（金氏）に従う四柱の神の 1 柱です。（一書：石窟）

- ：天日鷲神の子孫には、「阿波忌部氏」がありますが、父（イザナキ）や姉妹（天照大神）は、
- ：昔氏（于氏）で、朱蒙（東明聖王）の子孫になります。

- ※：つまり、解氏（解夫妻）の国（扶余）の中に、朱蒙（東明聖王）が国（高句麗：BC37 ~ BC19）を
- ：作った。解氏は、「陶津耳命（三嶋溝楯耳神）」の娘（再思の娘）を「天富命（事代主命）」が
- ：嫁にした後、没落した。
- ：朱蒙の子孫は、天日鷲神の父・天背男命（イザナキ）や姉妹（天照大神）が、頑張ったが、
- ：金氏（金首露）や、朴氏（中臣氏・蘇氏）との婚姻を通じて、だんだん没落していった。
- ：朱蒙の子孫（于氏）は、「阿波忌部氏（≠忌部氏）」の形で、残っています。

（図：「天御中主尊の 9 世の孫～12 世の孫」）



※：天鈿女命（53年頃生）の踊り（AD53年）について

- ：天照大神Aの没年は、AD53年と考えられます。そうすると、天鈿女命は、AD53年の時には、
- ：生まれたばかりの赤ん坊になります。
- ：天鈿女命の母親（天照大神B）が、天の石窟の中で、祖母（天照大神A）の死体のそばにいて、
- ：添い寝をしている時（又は、一緒に死のうとして、閉じこもっていた時）に、天の石窟の前で、
- ：生まれたばかりの「天鈿女命」が、ゆりかごの中で泣きだして、むずかっていたら、
- ：着物がはだけてきてしまったので、それを見ていた神様たちが大笑いをした。

- ：その後、皇孫（天押雲命）が（68年頃、出雲から筑紫へ）降臨の時に、『天鈿女命』もついて行った。
- ：『猿田彦大神（伊弉阿岐王：AD40年頃生）』と『天鈿女命』は、夫婦になった。

：第八段、八岐大蛇：スサノオが出雲に降り、アシナヅチ・テナヅチに会う。

：第九段、葦原中国平定・天孫ニニギの降臨、サルタヒコの導き、ヒコホホデミらの誕生。

：第十段、山幸彦と海幸彦の話。←（4世紀、風土記、倭建天皇のエピソードからの流用のため、省略。）

：第十一段、神日本磐余彦尊（かむやまといはれびこのみこと）誕生。

：巻第三：東征出発・八咫鳥・長髓彦・宮殿造営・橿原即位。

◎ 『風土記』東洋文庫版から見た、『風土記』に残っている移動の伝承

- （028）古老がいうことには、「すめみまの命（皇孫瓊瓊杵命）が天からお降りになったとき、御服（みぞ）を織るために従って降った神、み名は、綺日女命は、もと筑紫の日向の二所（ふたがみ）の峯より、三野（美濃）の国の引津根の丘においでになった。後、みまき天皇（崇神天皇）のみ世になって、長幡部の遠祖多豆（たて）命は、三野（美濃）を去って、久慈に移り、機殿（はたどの）を造り立てて初めてこれを織った。云々。

< 『常陸国風土記』の話 >

- 「倭武天皇は「サチ」を争った。倭武天皇は野（獵）に出かけた。橘皇后は海（漁）に出かけた。野の狩りは、一匹の獣もとれなかった。海の漁は、たくさんの美味なるものを得た。云々。

< 日本書紀の話 >

- 「山の獵が得意な山幸彦（弟）と、海の漁が得意な海幸彦（兄）の話である。
- 「兄弟はある日獵具を交換し、山幸彦は魚釣りに出掛けたが、兄に借りた釣針を失くしてしまう。

※：風土記の話は、日本書紀の「山幸彦と海幸彦」のエピソードの原型と思われる。

—：『風土記：薩摩国』：土地の人竹屋守の娘を召して、二人の男子（双子）をおもうけになった。

—：（双子は、「大碓皇子・小碓尊＝日本武尊」と、思われます。）

※：「イザナギ（紀：一書）」の人物を特定して、自作の系図に当てはめると、色々と見えてきました。

：ここからは、『先代旧事本紀』を使って、「神代」の時代の流れを見ていきます。

※：関東（房総）への移住の流れ

**（その1）**：「天富命（あめのとみのみこと）」<ウィキペディア>より

：天富命は、太玉命の孫。神武東征において橿原宮を造営し、阿波国に続いて房総の開拓をした。

：神武東征においては、手置帆負・彦佐知の二神の孫の讃岐忌部・紀伊忌部を率い、

：紀伊の国の材木を採取し、畝傍山の麓に橿原の御殿を作った。

※：「天富命」＝「事代主命」＝「許婁葛文王（75年頃生・155年没）」と考えています。そうすると、

—：神武天皇紀31年（121+30=151年）、神武天皇は、（畿内を）巡幸した。に、なります。ですから、

—：「天富命」による、房総の開拓は、152年頃と考えます。

(その2) : 風土記 : 伊勢の国は、12世の孫の天日別が平定した所である。伊勢津彦は、東に去った。

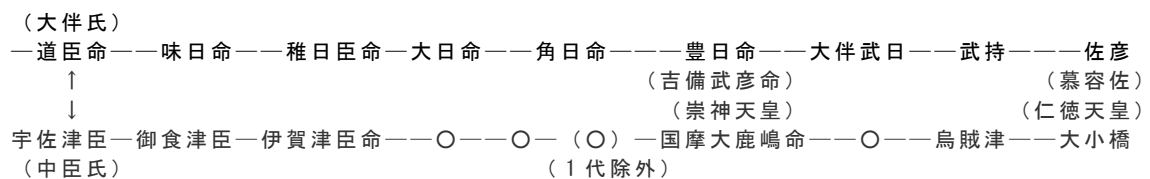
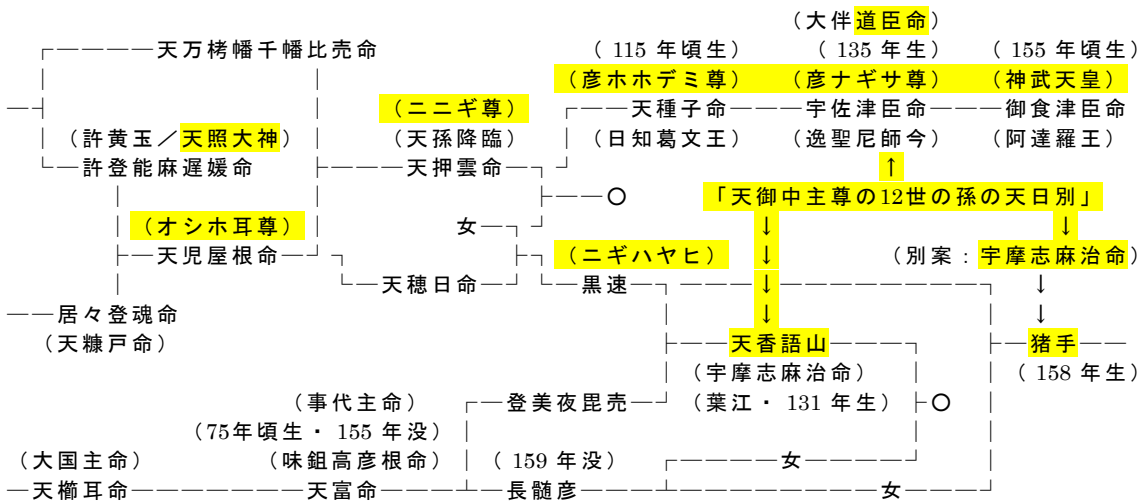
- : 卷第七 天孫本紀
- : 大歳甲寅 (きのえとら 174 年) 年冬十月五日 (辛酉 (かのとり)) 。
- : 天皇自ら諸皇子を率いて西宮より出発し、船軍を組んで東征に向われた [天孫紀に出ている] 。
- : 己未 (179 年) の年春二月某日 (庚辰) 。
- : 道臣命 (みちのおみのみこと) は、軍兵を率いて逆賊を見つけ次第討伐した状況を報告した。
- : 宇摩志麻治命 (うましまちのみこと) は天物部 (あまのものべ) を率いて、逆賊を切り平らげ、
- : また軍兵を還して海内を平らげ鎮め、その状況を報告した。

- : 卷第五 天孫本紀
- : 大歳辛酉 (181) 正月庚辰に天孫の磐余命は橿原宮に都を造り、初めて皇位に登られた。
- : 天種子命 (概算で、110 年頃生) は神代の古事 (ふるごと) や天神の寿詞 (よごと) を申し上げた。
- : 宇摩志麻治命 (葉江・131 年生) は内 (うちの) 物部を率いて、矛盾をたてて厳しく威を装い増した。
- : 道臣命 (みちのおみのみこと) は来目部の軍を杖を帯て門の開閉を掌り、宮門の護衛を行った。

※ : 180 年頃、「天御中主尊の12世の孫の天日別」 = 「大伴道臣命」 = 「宇佐津臣命 (135 年生) が、  
 \_ : 伊勢の国を平定したと、考えています。(伊勢津彦については不明です。)

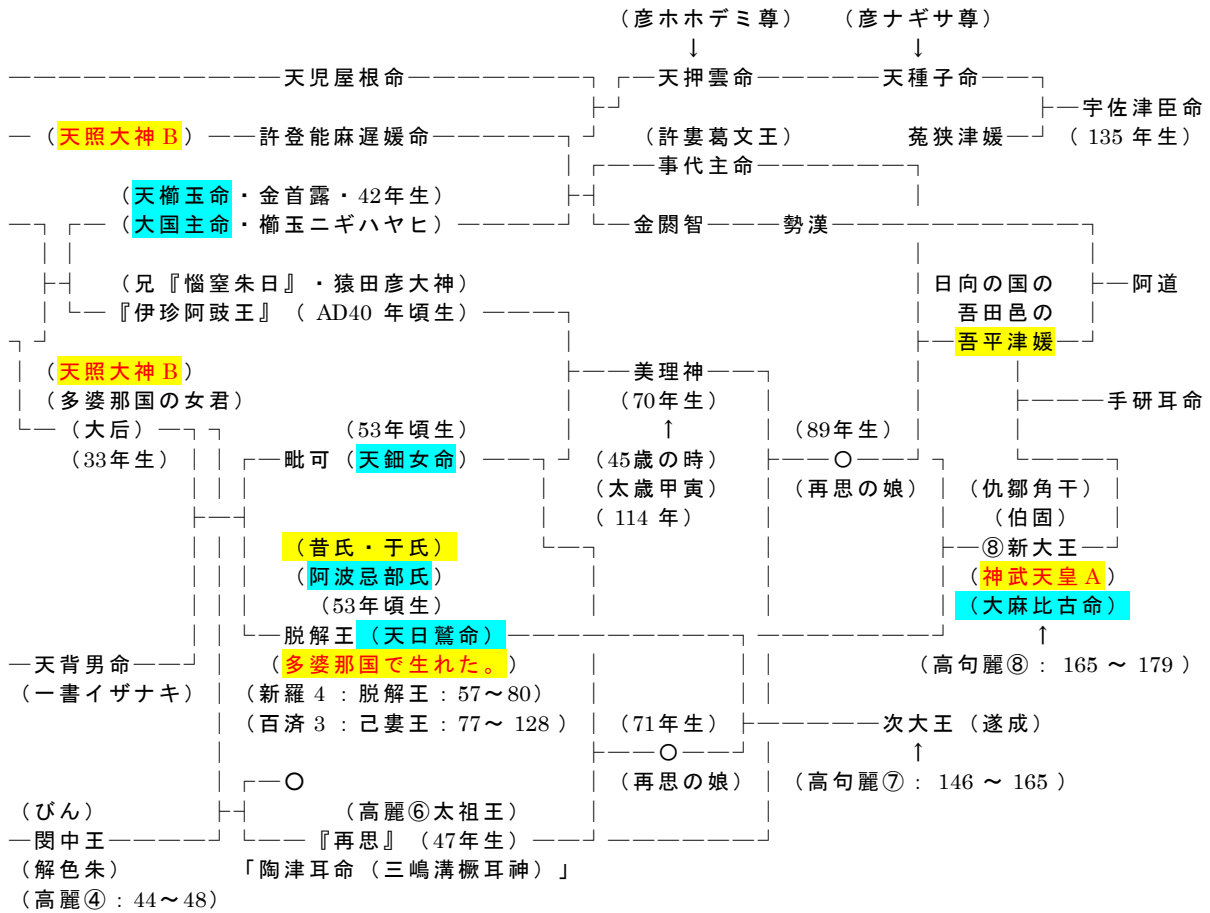
(その3) : 景行天皇紀40年 : (東国平定を) 吉備武彦と大伴武日連とに命じて、日本武尊に従わせた。  
 : 常陸国風土記 (東洋文庫 P-16) より \_ 古老のいうことには、  
 : 「崇神天皇のみ世に、東方の辺境の荒賊を平定するために建借間命 (たけかしま) を遣わした。

※ : 私は、「吉備武彦 = 大伴武日連 = 崇神天皇 = 建借間命 = 国摩大鹿嶋命」と、考えています。  
 \_ : 崇神天皇紀と景行天皇紀の干支は、(シンメトリック論より、) 「12 x n 年」ズレていますので、  
 \_ : (311 - 36 + 39) = (314 年) 日本武尊に斧鉞を授けた。吉備武彦に従わせた。と考えています。





：天櫛玉命（あめのくしたま）――、鴨県主らの祖： (P-09)  
 (『先代旧事本紀』天照国照彦天火明櫛玉鏡速日尊)  
 (あめのほあかり・くしたま・にぎはやひのみこと)



※：出発地点としての「南九州」について

(その1)：『風土記』に登場する「ニニギ尊」について

◎ 『風土記』東洋文庫版から見た、『風土記』に残っている

「天孫降臨のモデル（ニニギ尊～ホホデミ尊）」の移動の伝承

※：ニニギ尊の子ども2人を「大碓皇子・小碓尊＝日本武尊」と仮定してみました。

(頁数)	登場人物	地域	内容
(343)	天孫	豊前国宮処(みやこ)	から日向の旧都に天降った。天照大神の神京(みやこ)である。
(350)	ニニギ尊	日向	天降りなされた
(348)	景行天皇	肥後	球磨ソを討った 大足彦＝景行天皇
(353)	ニニギ尊	薩摩国	土地の娘との間に、男子2人をもうける 日向から薩摩にうつる

※：『風土記』に書かれている「ニニギ尊」の話は、3世紀末の「景行天皇」の話と見ることが出来ます。

※：「関東(房総)への移住の流れ(その1・2・3)」には、薩摩隼人(佐伯)は、登場しません。

―：ですので、いわゆる「神武東征」には、南九州の兵士(隼人)は、関わってはいません。

―：系図で、「佐伯」が登場するのは、5世紀になってからです。

(その2)：神武天皇の妃「日向の国の吾田邑の吾平津媛」について

※：朴昌和版「婆娑尼師今記」(2世紀)に、「冬宅」という表現を見つけたので、考察をします。

(以下の文章には、米田は多少、加筆修正しています。ハングルは省略。)

( P - 10 )

No.10321 娑婆尼師今記 19 年 ,AD144 年-1 投稿者 :radio 投稿日 :2009/11/18(Wed) 01:11

: 十九年 正月 以摩帝爲伊伐滄 美禮爲稟主 吉門爲都護使 支所禮爲南路軍事  
 : 樊五爲京路軍事 加亥曷名爲軍母 吉元爲馬政大師 沙乙那爲馬母  
 : 車門允良爲別軍使 上幸美禮于政堂 上自昨冬 累幸摩帝宅 寵愛美禮  
 : 復其稟主 至是命入常侍 賜權妻毛多于摩帝 以爲密妻  
 :  
 : 五月 以君乙爲水路軍事 以權妻多利妻之 多利爲君乙之侄 情兒相似 潛通于井而有娠  
 : 上許與之吉 上召伊利生主之 是日以允良爲井頭 啓其爲別軍使

74. 江口素里奈\_\_ 2015/10/25 18:15

>>73

Original No.10321 娑婆尼師今記 19 年、 A.D.144 年—1 radio 氏。

Reference 米田喜彦氏 採録 Dated on 2015 / 10 / 23 漢文原文 & ハングルを和訳する。

: 19 年 ( A.D.144 年 ) 1 月、摩帝を伊伐滄に、美禮 ( ミレ ) を稟主に、吉門 ( キルムン ) を都護使に、  
 : 支所禮を南路軍事に、樊五 ( ベンオ ) を京路軍事に、加亥 ( カヘ ) と曷名 ( カルミョン ) を軍母に、  
 : 吉元 ( キルオン ) を馬政大師に、沙乙那 ( サオルナ ) を馬母に、車門 ( チャムン ) と允良  
 : ( ユンリャン ) を別軍使に それぞれ任命した。お上は政堂へ美禮 ( ミレ ) と行幸になられた。  
 : お上は昨年の秋以来 摩帝 ( マジェ ) の屋敷にしばしばお出ましになられた。  
 : 美禮 ( ミレ ) をご寵愛になり、再び彼女を稟主に復帰させた。ここにいたって入闕を命じて  
 : 恒常傍に仕えるようにした。権妻毛多 ( モタ ) を摩帝 ( マジェ ) に下賜して、密妻に位置させた。  
 :  
 : 5 月、君乙 ( グンオル ) を水路軍事に、権妻多利 ( タリ ) を彼の妻にと定めた。  
 : 多利 ( タリ ) は君乙 ( グンオル ) の姪なのであるが、容貌と性格が似ており、  
 : 井 ( 井において [ 場所名 ] ・「翻訳不可お詫びします。素里奈」) に  
 : おいて潜通 ( 内密に行くこと ) して妊娠した。お上は彼との結婚をお許しになった。  
 :  
 : お上は伊利生 ( イリセン ) を呼んでその結婚を司とるようにお命じになった。  
 : この日 允良 ( インリャン ) を井頭に、啓其 ( ケキ ) を別軍使に任命した。

\* 3 月か、5 月か原文が不確かである。

\* 上章敦牂 ( 古文書・歴史書と見る「訳者加筆」) に君乙 ( クンオル ) は大樹 ( デス ) の息子、  
多利 ( タリ ) は 系譜図 ? ( 意味不明 ) がない。

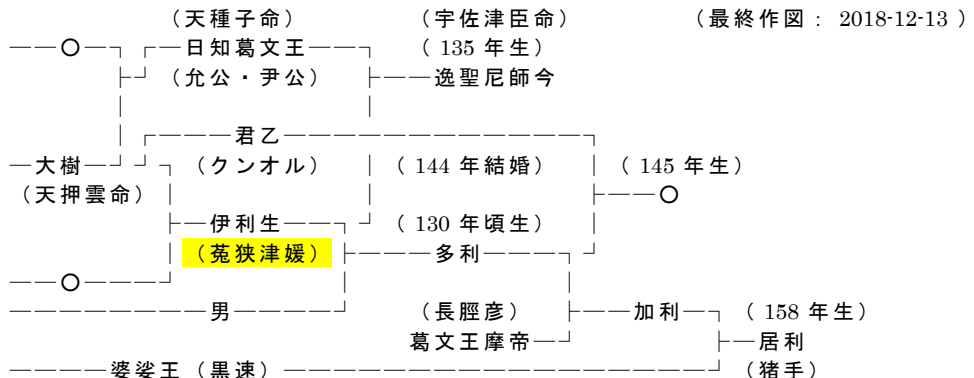
19 年 5 月記事から多利は 逸聖尼師今 ( \* 允公 ( ユンゴン ) と伊利生 ( イリセン ) の息子 ) の  
姉とされて、結婚を司とった人が伊利生であるから、多利が 伊利生の娘であると推定できる。  
伊利生は大樹の娘である。即ち、君乙は多利の外叔父に当たる。

\* 訳者蛇足 radio 氏は、逸聖尼師今の系譜を「允公 ( この名前訳者当て字です。 ) と伊利生の息子」と  
見ておられるようですが、私 ( 素里奈 ) が『三国史記』で見た記録では、 . . .  
“ 逸聖尼師今 ” は 始祖 赫居世から七代目に記され 儒理王の長子 [ もしくは日知葛文王の子とも  
いわれている ] 妃は朴氏、支所禮王の娘である。と、なっています。 ( ご参考までに ) 。  
 . . . . .

君乙 ( クンオル ) は大樹 ( デス ) の息子。

19 年 5 月記事から多利は 逸聖尼師今 ( イルソング ニサグム ) ( \* 允公 ( ユンゴン ) と  
伊利生 ( イリセン ) の息子 ) の姉とされて、結婚を司とった人が伊利生であるから、多利が  
伊利生の娘であると推定できる。伊利生は大樹の娘である。即ち、君乙は多利の外叔父に当たる。

( 推定図 )



「逸聖尼師今」は 始祖 赫居世から七代目に記され 云々。

菟狹津媛

瓢公一倭人(新羅:4~24) (新羅:24~57) | (135年生)  
(津速魂命) (市千魂命) (居々登魂命) (天児屋根命) (天押雲命) (天種子命) | 逸聖尼師今  
①赫居世 ②南解次次雄 ③儒理尼師今 「弩禮王」 大樹角干 日知葛文王 (宇佐津臣命)

No.10324 婆娑尼師今記 20年,AD145年-2 投稿者:radio 投稿日:2009/11/18(Wed) 01:18

: 十月 上與美禮入冬宅 愛有公 稟主于時妬之曰 “妾以承寵稟主 反屈於前稟乎”  
: 上曰 “汝亦生子如此 則當如此” 干時曰 “人言夫今不好色 我謂大好色”  
: 上怒復以美禮爲稟主 摩帝伊伐滄 流發良干時于推火

82. 江口素里奈\_\_ 2015/11/06 05:42

>>81 Original No.10324 婆娑尼師今記 20年、A.D.145年-2 radio氏。  
Reference 米田喜彦さま採録 Dated on 2015/11/04 枠内のハングル及び漢文を和訳する。

: 10月、お上(婆娑王)は美禮(ミレ)と冬宅へとお入りになられた。  
: (婆娑王は)愛することを公平になさったが、稟主である干時(カムシ)がこのことを嫉妬していうには  
: “妾(わたし)は寵愛を受ける稟主なので、以前の稟主に反対に屈することが出来ましようか?”  
: お上(婆娑王)は答えて曰く  
: “お前もやはり このように(私の)息子を生んだからには、当然ではないか”とした。  
: 干時(カムシ)が答えていうには  
: “人々は夫君(ブクム)は色を好まないとおっしゃいますけど、私は色を多く好むと考えます”とした。  
: お上はお怒りになり、美禮(ミレ)を稟主に、摩帝(マジェ)を伊伐滄に叙任した。  
: 干時(カムシ)を 推火に流配(島流し)した。  
.....

※: 「稟主」とは何か・・・「米倉の管理の長官」とは、まさに、地域の領主そのものである。  
※: 「冬宅」について

※: はじめは、(10月ですから)出雲に、行かれたのではないかと考えました。  
\_: でも、冬の山陰は、寒いです。そこで、次に「阿多(吾田)」を考えました。  
\_: 美礼の母親は、只珍内礼夫人で「吾田邑の吾平津媛」です。  
\_: 吾田邑は、(岩波文庫によると)薩摩国阿多郡阿多郷  
\_: 神代紀第9段に、吾田長屋笠狭之碕とある。

※: 阿多郡(あたのこおり・あたぐん)は薩摩国にかつて存在した郡である。(現・南さつま市)  
\_: (もしかすると、第2案:) 鹿児島県大島郡瀬戸内町阿多地←←←(奄美大島にありました。)  
※: そうすると、冬の寒い時期には、鹿児島県西部にある、冬宅に行き、のんびりと暮らしていたの  
\_: かな。そんなことを考えてみました。このように考えると、「投馬国」のことかな、と考えました。

PS : 「冬宅(吾田)」について: 「笠狭之碕」は、(現代の)地図では、「笠沙町」になっています。  
PS : 145年当時の、戦闘の規模については、下記の文章が参考になると思います。

No.10323 婆娑尼師今記 20年、AD145年-1 投稿者:radio 投稿日:2009/11/18(Wed) 01:15

: 九月 加耶女與半阿爭位 加耶襲居陀 長世聞急救之 戰沒 上怒命吉門率京騎一千  
: 引南水勇士五千 三路掩殺 大獲勝利

80. 江口素里奈\_\_ 2015/11/01 11:48

>>79Original No.10323 婆娑尼師今記 20年、A.D.145年記 radio氏 Reference 米田喜彦氏 再録  
Dated on 2015/10/29 枠内 ハングル 漢文を和訳する。

: 9月 加耶女と半阿(パンア)が 位を争った。伽耶が居陀を襲撃した。  
: 長世(ジャンセ)加召城主が知らせを聞いて急きょ救援に趣いたのであるが、戦いの最中に戦没した。  
: お上(婆娑王)はお怒りになり 吉門(キルムン)に命じ騎兵1千名を引率させ、南水「南路と水路」の  
: 勇士5千名を引き連れて、三路は不意打ちを食らわして殺傷し、大きな勝利を得た。

※：「橋頭保」としての「淡路島」について

(その1)：「イザナキ」について

※：「イザナキ（百濟②多婁王・天背男命：阿波忌部の祖先）」は（淡路島で）AD77年に亡くなった。

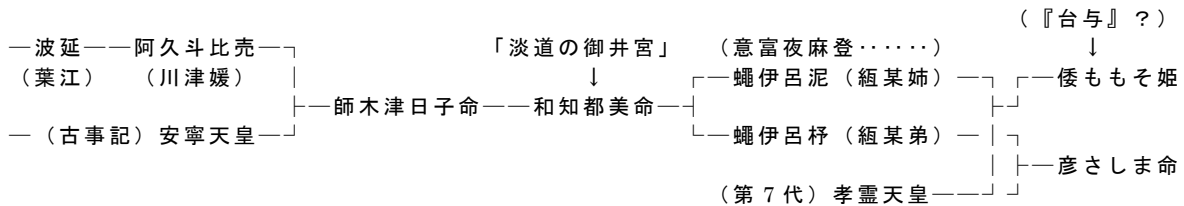
\_\_：「阿波忌部の祖先」である「イザナキ」は、出雲（天孫降臨）・九州北部（天孫ニニギの降臨）を経て、AD77年には、淡路島まで来たことが、分かります。

(その2)：「淡道（あわじ）の御井宮（みいのみや）」について

※：古事記によると、「和知都美命」は、天皇でないのに、淡路に「宮」を構えています。

\_\_：「和知都美命」は、淡道（淡路）に居た后（妃）だろうと思います。

\_\_：古事記の記述（続柄）に沿って系図を書くと、下図のようになります。



(その3)：「天日槍」について

※：日本書紀によると、垂仁天皇3年、天日槍が来帰した（帰って来た）。と、あります。

\_\_：垂仁天皇元年（壬辰）を仮に、272年としますと、3年は、274年になります。

※：「一書」によると、天日槍は、「播磨の国の穴粟（しさわ）邑」と「淡路島の出浅（いでさ）邑」を

\_\_：与えられています。

\_\_：私は、「天日槍＝塞曹掾史張政＝孝霊天皇」と考えています。

\_\_：ですので、最初にやって来たのは、248年頃と考えています。（孝霊天皇元年辛未：251年）

※：「イザナギ・イザナミ」が、作られた名前であることを、見つけた人がいました。

※：（全邪馬連会員：白崎勝氏の考察）

「この伊邪那岐、伊邪那美の名が、魏志倭人伝に登場するクニの国名から、  
一文字ずつ採った名であることを発見した。  
各順1 伊一伊都国  
各順2 邪一邪馬台国  
格順3 那一奴（那）国  
格順4 美一不弥（宇美）国  
格順5 岐一壹岐国  
3、伊邪那美岐の文字順は、クニの格順になっている。  
伊邪那美岐の文字並びは、採用したクニの格順になっている。」

※：そうすると、「台与」が、「イザナミ」になります。

※：『風土記』の「ニニギ尊」の話は、3世紀末の「景行天皇」の話と見ることが出来ることや、

\_\_：崇神天皇紀に大物主命が登場していること、シンメトリックが、孝霊天皇の即位（AD251年・辛未）を

\_\_：始まりにしていることなど、これらをすべて合わせると、

\_\_：「日本書紀」編纂にあたっては、「ポスト卑弥呼」を、国の始まりと考えていたことが分かります。

\_\_：それが、何らかの理由で、「国の始まり」をもっと古くする必要が出てきたみたいです。

：第八段、八岐大蛇：スサノオが出雲に降り、アシナヅチ・テナヅチに会う。

：第九段、葦原中国平定・天孫ニニギの降臨、サルタヒコの導き、ヒコホホデミラの誕生。

：第十段、山幸彦と海幸彦の話。←（4世紀、風土記、倭建天皇のエピソードからの流用のため、省略。）

：第十一段、神日本磐余彦尊（かむやまといはれびこのみこと）誕生。

：巻第三：東征出発・八咫鳥・長髓彦・宮殿造営・橿原即位。

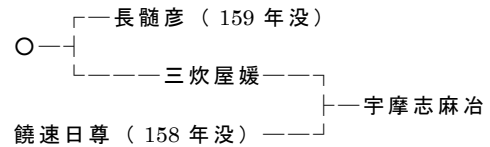
※：以上で書き終わるつもりでしたが、次頁以降、（いつ・誰が）橿原で即位したかを考察します。

< 神武天皇の東征（物語）の中での、饒速日命のエピソードは、すべて作り話である。 >

「饒速日尊（158年没）」を同一人物として、3つのエピソードを比較してみます。どのエピソードを選ぶにしても、年代的に見て、饒速日尊（158年没）が長髓彦（159年没）を殺すことは、不可能です。

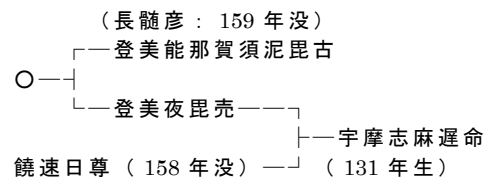
※：「日本書紀」

- \_\_：饒速日命は、長髓彦の性質が反抗的で、
- \_\_：天と人との〔分〕際を教えてもだめと見て、殺した。
- \_\_：饒速日命は、その衆をひきつれ帰順した。



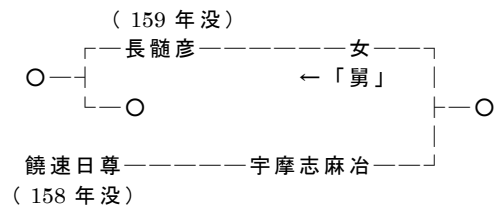
※：「古事記」

- \_\_：登美毘古を殺したのは、神武天皇。
- \_\_：邇芸速日命は、神武天皇のもとに参上した（帰順した）。
- \_\_：邇芸速日命が登美毘古の妹の
- \_\_：登美夜毘売と結婚して生んだ子は宇摩志麻遲命である。



※：「先代旧事本紀」（天孫本紀）

- \_\_：長髓彦は、「天神の御子は二人も居る訳が無い。」
- \_\_：天孫の軍は連戦したけれども勝つ事が出来なかった。
- \_\_：この時、宇摩志麻治命は舅の作戦に従わず、
- \_\_：帰ってきたところを誅殺した。
- \_\_：そして、（宇摩志麻治命は）衆を率いて帰順された。



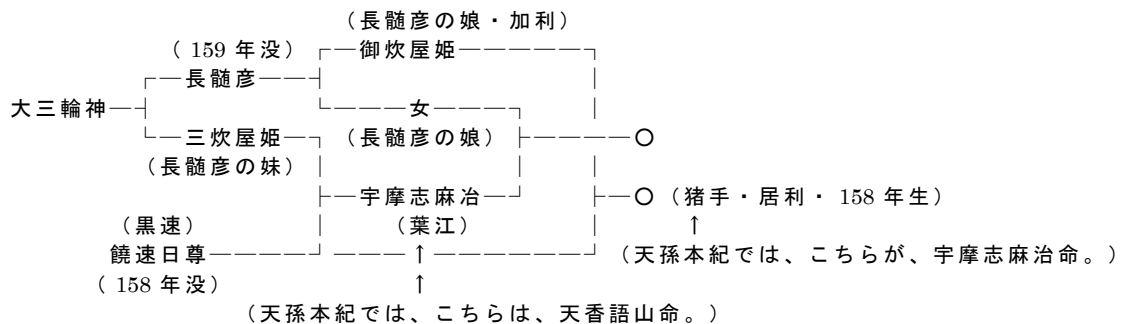
※：神武天皇による巡幸は、（神武天皇31年：151年頃に）あったと思いますが、

- \_\_：饒速日尊の天磐船は、152年頃（157年頃）にあったと思います。

※：「先代旧事本紀」（天孫本紀）

- \_\_：饒速日尊は天磐船にのって、河内の国の河上の哮峰（いかるがのみね）に天下った。
- \_\_：大倭の国の鳥見の白庭山（しらにわのやま）に移った。饒速日尊は長髓彦の娘の御炊屋姫を娶り、
- \_\_：懐妊させた。（子どもが）生まれる前に、饒速日尊はお亡くなりになった。
- \_\_：天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊は天道日女命（あめみちひめのみこと）を妃とし、
- \_\_：天上に天香語山命（あめかごやま）を生む。御炊屋姫を妃として天降り宇摩志麻治命を生む。

※：上記三書の合成図



※：彌彦神社（いやひこじんじゃ、常用漢字体：弥彦神社）（ウィキペディアより）

- ：彌彦神社は、新潟県西蒲原郡弥彦村弥彦にある神社。 ※：神歌楽（かがらく）
- ：歴史・概史
- ：創建年代は不詳。祭神の天香山命は、『古事記』に「高倉下」として登場する。社伝によれば、命は
- ：越後国開拓の詔により 越後国の野積の浜（現 長岡市）に上陸し、地元民に漁撈や製塩、稲作、養蚕
- ：などの産業を教えたとされる。このため、越後国を造った神として弥彦山に祀られ「伊夜比古神」として
- ：崇敬された。このほか、彌彦の大神は、**神武天皇即位の大典の際に**自ら神歌楽を奉奏したとされる。

◎：朴昌和版「婆娑尼師今記」と『古事記』との時系列の流れ（人物の特定は、推定です。）

- 130年：脱解王が死んだ。
- 131年：四省聖母が太氏・祇摩王（葉江）を生んだ。
- 135年：大豊大母の伊利が逸聖（宇佐津臣命）を生んだ。
- 136年：恵后が死去。婆娑王は、雌神史省（史省夫人）を皇后にした。
- 138年：聖父（許婁葛文王）の密妻・沙乙那が（男女の）双子を生んだ。 ←：（五十鈴依媛命）。
- 139年：大樹角干（続柄不明）が死んだ。 天孫「饒速日尊」の即位か。
- 139年：権妻「道生」を聖父（金氏許婁葛文王＝事代主命）の正妻にした。 ↓  
 \_\_\_\_\_（人物Xの即位は、AD140年。）
- 140年：美礼が摩帝（長髓彦）の娘・愛礼を生んだ。
- 141年：史省夫人（許婁の娘）が婆娑王の娘、婁生（川派姫）を生んだ。 （岡田宮に1年間）
- 142年：骨久が婆娑王の娘・骨花を生んだ。 （多祁理宮に7年間。：142～148年）
- 146年：美礼が相議の子・馬公を生んだ。 ↓
- 148年：\_\_\_\_\_（多祁理宮に7年間。：142～148年）
- 149年：\_\_\_\_\_（高島宮\_\_に8年間。：149～156年）
- 152年：沙乙那を摩帝の密妻にした。 4月、摩帝の娘「愛礼」を「祇摩太子」の妃とした。
- 155年：閼智神君が死んだ。 許婁葛文王（味鋌高彦根命＝事代主命＝大三輪神）が死んだ。
- 156年：愛礼夫人を 雌神聖母にした。 （高島宮\_\_に8年間。：149～156年）
- 157年：史省夫人＝史后を「太聖」にした。 \_\_\_\_\_ 「ニギハヤヒの（黒速）」の「天の磐船」。
- 158年：婆娑王の子「居利（猪手）」が誕生。 \_\_\_\_ 「婆娑王（ニギハヤヒ・黒速）」が死んだ。
- 159年：葛文王摩帝（長髓彦）が死んだ。

◎：『日本書紀』：天皇は巡幸した。（神武31年＝151年）

（152年頃）「饒速日尊」は天磐船にのって、河内の国の河上の嵯峰（いかるがのみね）に天下った。

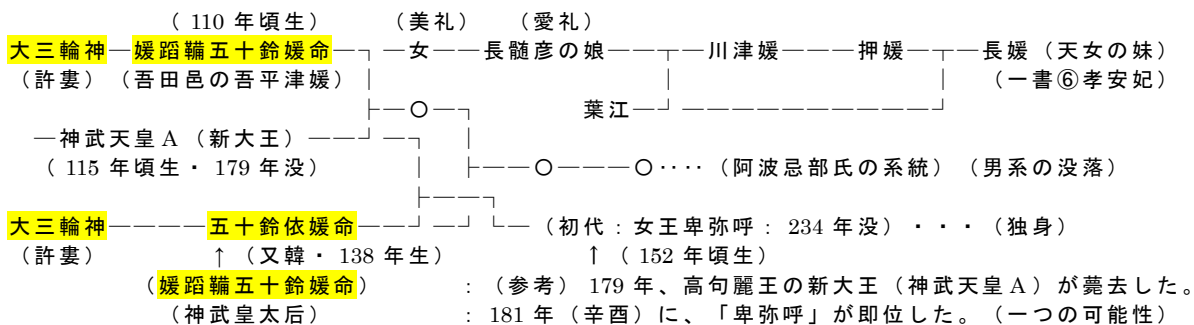
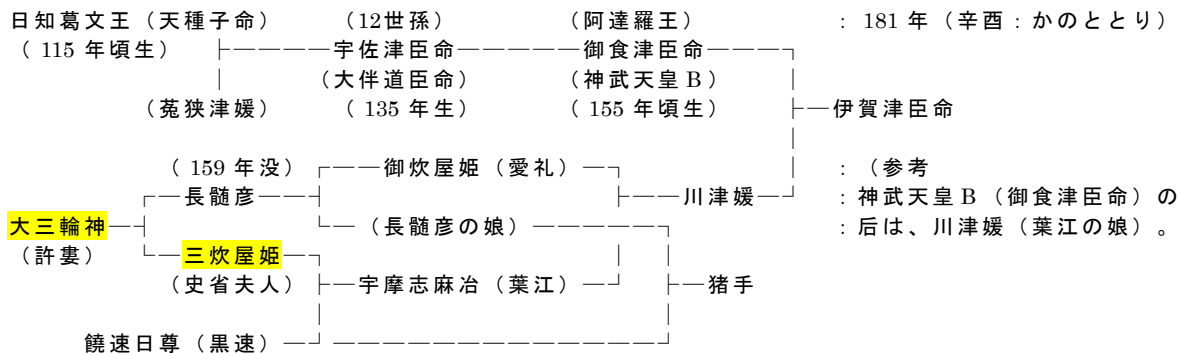
- ◎：『先代旧事本紀 卷第五 天孫本紀』（天孫「饒速日尊」を祖とする物部氏の系譜）
- （157年、）「饒速日尊（黒速）」は、大倭の国の鳥見の白庭山（しらにわのやま）に移った。
- （158年、）（味間見命が）生まれる前に、饒速日尊（黒速）は、お亡くなりになった。
- .....
- \_\_：「神武天皇A」＝「伯固」＝「高句麗新大王（115年頃生・165年即位・179年薨去）」。
- \_\_：「天富命（鴨王＝事代主命）」は、先遣隊として、神武東征に登場し、橿原宮を造営した。

『三国史記』（新羅本紀：阿達羅王）と、『日本書紀』（神武天皇紀：干支）の時系列の流れ

- 173年：倭の女王卑弥呼が使者を送って（阿達羅王を）来訪させた。  
 （推測）神武天皇B（阿達羅王）と川津媛（郁甫）との結婚のため、来訪した。
- 174年太歳甲寅：きのえとら：（道臣命＝逸聖王＝宇佐津臣命は、）九州を出発した。
- 174年甲寅：安芸の国について、 174年、「埃（え）の宮」に居た。
- 175年乙卯：吉備の国に入った。 175～177年、高島の宮という。  
 :（3年が云々。）
- 178年戊午：皇軍は、ついに東した。
- 179年己未：春2月20日、諸将に命じて云々。橿原に帝宅を造りはじめた。
- 180年庚申：正妃をたてた。
- 181年辛酉：（神武天皇B＝御食津臣命＝阿達羅王）神武天皇は橿原の宮で帝位についた。
- 184年 : 阿達羅王が薨去した。（阿達羅王の墓は、新羅にある。）

◎：『先代旧事本紀 卷第七 天皇本紀』（神武天皇の章） \_\_\_\_ 太歳甲寅（きのえとら：174年）

- 174年（太歳甲寅）の年冬十月。天皇自ら諸皇子を率いて西宮より出発し、船軍を組んで東征に向われた。  
 [天孫紀に出ている]
- 179年（己未）の年春二月。道臣命は、軍兵を率いて逆賊を見つけ次第討伐した状況を報告した。  
 28日。宇摩志麻治命（兄）は天物部を率いて、逆賊を切り平らげ、  
 また軍兵を還して海内を平らげ鎮め、その状況を報告した。
- （参考）179年、高句麗王の伯固（神武天皇A）が薨去。
- 181年（辛酉：かのととり）年を元年とした。春正月一日、橿原に都を造り初めて皇位に登られた。  
 正妃の踏鞴五十鈴媛命を尊んで立てて皇后とした。←（：皇太后か）  
 大三輪神（おおみわのかみ）の娘で有る。



朴昌和版「婆娑尼師今記」152年。 : 沙乙那を摩帝の密妻にした。  
 : 4月、摩帝の娘「金氏愛礼 (140年生)」を「祇摩太子」の妃とした。  
 『三国史記 : 新羅本紀』祇摩尼師今 (三国史記での在位 : 112 ~ 134)  
 : 太子 (祇摩王) は [摩帝の] 娘 (愛礼 : 140年生) をみて悦んだ。

: むかし婆娑王が楡滄 (ゆさん) の沢で狩猟をした時、太子もこれに従った。狩猟ののちに、  
 : 韓岐 (かんき) 部にたち寄った。伊滄の許妻は、彼らをもてなした。酒宴がたけなわになった時、  
 : 許妻の妻 (沙乙那) は、一人の少女 (又韓 : 138年生 : 15歳) をつれて出、 [その娘が舞を] 舞った。  
 : 摩帝伊滄の妻 (美礼) もまた娘 (愛礼) をつれて出た。太子 (祇摩王) は、 [摩帝の] 娘「愛礼」  
 : (140年生 : 13歳) をみて悦んだ。婆娑王は、許妻に酒多 (のちの「角干」) の位 (くらい) を与えた。

※ : 「朴昌和版 : 婆娑尼師今記」と「新羅本紀 : 祇摩尼師今 (在位 : 112 ~ 134)」を比べてみると、  
 \_ : 年代は、「朴昌和版」の方が正しいことが分かります。そうすると、祇摩太子 (王) の結婚の時期が、  
 \_ : 152年であることが分かります。許妻の妻 (沙乙那) の娘 (一人の少女 : 15歳) は、もしかすると、  
 \_ : 神武天皇 A の娘 (女王卑弥呼 : 152年頃生) を妊娠中かも知れません。  
 \_ : また、「152年、沙乙那を摩帝の密妻にした。」という記事から、  
 \_ : 許妻葛文王 (天富命 = 鴨王 = 事代主命) は、東国へ遠征している可能性があります。

※ : 朴昌和版「婆娑尼師今記」婆娑尼師今記 33年 (AD158年) より  
 : 十一月 上与史后愛礼受大朝于南桃 以愛礼為雌神聖母 史后為太聖  
 : 加耶世主正見 子朱日立 自称阿今

: 11月、祇摩王は、史后 (史省夫人) ・愛礼夫人とともに、即位の儀式を受けた。  
 : 愛礼は雌神聖母で、史后 (史省夫人) を太聖 (テソング) にした。  
 : 加耶世主の正見が死んで、子の朱日が即位した。自称 阿今 (アシグム) といった。

※ : 「大麻比古命 (神武天皇 A)」は、110年頃生。「由布津主命」は、130年頃生と考えます。  
 \_ : 「天富命 (事代主・75年頃生・155年没)」が、娘婿の  
 \_ : 「由布津主命 (手研耳命) 130年頃生」を伴って、「房総の開拓」に向かうとすると、  
 \_ : 「大麻比古命 (神武天皇 A)」による「神武東征」は、「『日本書紀』 : 天皇は巡幸した。  
 \_ : (神武31年 = 151年)」と、考えられます。  
 \_ : これは、あくまでも、「巡幸」・「神武東征」であって、「即位」ではありません。  
 \_ : ですから、「房総の開拓」は、152年頃と考えられます。